



反回神経の歴史-1

I. はじめに

甲状腺手術の中で最も難しく、「神経を使う」所は、やはり反回神経（下喉頭神経）周囲の処理です。医学史の中でも、反回神経に関しては約2000年前まで遡ることができます。

II. 偉大な解剖学者たち

1) ガレヌス

ガレヌス(AD130-200)は ペルガモン(トルコ)に生まれた解剖学者です。精気説などを唱えた学者ですが、特筆すべきは実験生理学の業績です。現代の研究室のように実験スタッフを集めて約500の論文を発表し、その中の83編が現存しています(図1、2)。



図1：ガレヌスの肖像

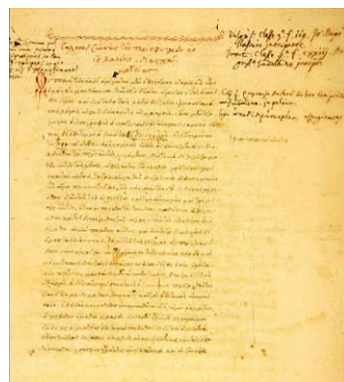


図2：ガレヌスの原稿
(1550年頃、ラテン語の
脚注あり)

2) ヴェサリウス

ヴェサリウス(Andreas Vesalius, 1514-1564)の *Fabrica* (1542) は近代解剖学の金字塔とも言うべき有名な書物です。近代解剖学の基礎を築いたヴェサリウスはブリュッセルに生まれ、パリ大学で学び、パドバ大学外科学教授、ボローニャ大学客員教授、神聖ローマ帝国皇帝カール5世の侍医を勤めました。



図3：ヴェサリウスの肖像 (Fabricaの表紙)

ガレヌスはブタを用いた実験で両側反回神経を切断すると声が出なくなり、呼吸困難が生じることを報告しています。これは、極めて重要な知見ですが、この発見の重要性は長きにわたり忘れ去られました。ガレヌスの名前は現代でも『ガレヌスの吻合(喉頭内での上喉頭神経と下喉頭神経の吻合)』として残っています。

それにしても、ガレヌスは何故ブタの反回神経を切断する実験を思いついたのでしょうか？ 素朴ですが、永遠に解けない疑問でしょう。

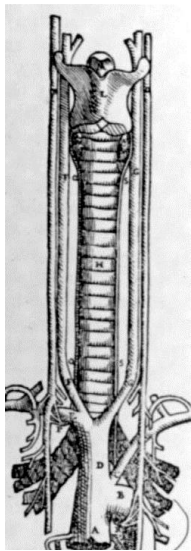


図4
反回神経の解剖
(Fabrica)

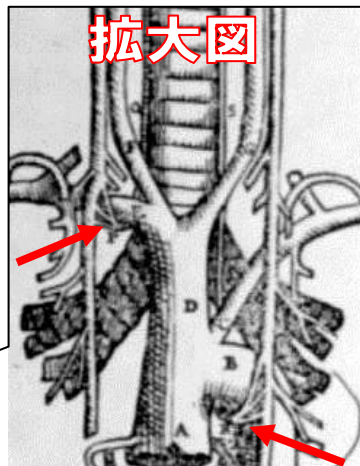


図5
反回神経の反回ポイント

Fabrica には、左右の反回神経が大動脈弓や鎖骨下動脈を反回し、喉頭に流入する様子が詳細に描かれています。Fabrica のレプリカは広大医学部図書館の玄関にドーンと陳列されており、目にされた人も多いでしょう。小生は、度厚かましく学生講義に必要なことを力説し、図書館員の方にあの超特大の重い本を陳列ケースから出していただき、カメラに納めることができました（図書館員の温かい配慮に感謝！）。図3、4、5はその時にカメラに収めたものです。

Fabrica を持ち歩いて、解剖学の勉強することは物理的に不可能なことです。500年以上前に、このような詳細な解剖学書を著したヴェサリウスの情熱には脱帽します（ヴェサリウスには少年時代から色々な逸話がありますが、ここでは敢えて割愛させていただきます）。

3) 16世紀の解剖学者たち

16世紀はその他にも多数の偉大な解剖学者を輩出しています。パドバ大学のファロッピオ(Gabriele Falloppio, 1523-1562)は卵管、

ローマ大学のエウスタキウス(Bartolomeo Eustachio, 1524-1574)は耳管、ボローニャ大学のアランチオ(G.C. Aranzio, 1530-1589)はアランチウス管、パドバ大学のファブリチオ(Girolamo Fabrizio ab aquapendente, 1533-1619)は静脈弁などで有名です。

III. 最近の解剖学書

外科医にとって解剖学書はバイブルの様なものです。手術中に遭遇する血管や神経のヴァリエーションは様々で、毎回新鮮な発見があります。手術後に解剖学書を紐解いて、勉強しなおすことは極めて重要です。現在7冊の解剖学書を手元においています。グ○ン○の最新版などは昔と比較できないほど、カラフルで綺麗になっていますが、内容に乏しいのと誤植が多いのには閉口します。

現代医学の興味は、分子生物学、iPS、などの最先端分野に集中し、地道な臨床解剖は忘れ去られています。

現代のヴェサリウスの出現が待たれます。

参考文献

1. 小川鼎三。医学の歴史。中公新書
2. ヌーランド。
医学をきずいた人々。河出書房

